

国内経済情勢

概観

鋳工業生産は、依然増加基調を改めるには至っていない。引締めの一掃は業種によって区々であり、一部では減産体制がかなり進められつつある一方、なお従来からの生産態度に目立った変化がみられぬ業種も少なくない。商品市況は、引き続き軟弱の地合いを示しているが、生産調整など市況対策の進展をみた鉄鋼、石油などでは、最近下げ一服の商状もみられる。この間、企業の資金繰りはとくに著しくひっ迫したとはみられないが、手元流動性は徐々に低下傾向をたどっているものとみられる。

国際収支面では、上述の生産活動を背景に、輸入は依然高水準を維持しているため、輸出の順調な伸びにもかかわらず貿易収支は赤字を続け、総合収支も逆調を示している。先行指標の面からは、輸出の好調、輸入のいくぶんの鈍化の傾向がうかがわれるが、経常収支の赤字基調は継続するものとみられる。

生産の増加続く

鋳工業生産(季節調整済み)は、1、2月大幅上昇の後3月減少をみたが、4月には+2.1%(速報)と、再びかなりの上昇を示した。これには、好調業種たる自動車、造船などの輸送機械の増加のほか、大型機械の増加が大きく響いている。一方、鉄鋼、非鉄、化学などの生産財は若干減少しているが、後二者には一時的要因がかなり影響している。いずれにしても生産の実勢は依然増加を続けているものとみられる。最近の傾向としては、業種間の跛行性が改まらず、石油、鉄鋼、そ毛糸、人絹糸、工作機械などの業界では、市況対策としての生産調整の動きがかなり進捗している反面、

自動車、合織、非鉄、化学、紙などの業種ではなお需要がさして衰えず、引締めの影響がその生産態度に十分反映するまでに至っていない。

鋳工業出荷は、4月中-0.6%と減少に転じた。これは、耐久消費財の出荷が前月著増の反動減をみたことを主因としているが、生産財の出荷も当月は引締め以来初めて減少している。

メーカー製品在庫は、3月減少のあと4月には再び微増となり、在庫率もいくぶん上昇した。これは、耐久消費財の増加を主因としている。生産財は、石油の在庫調整などを中心に若干減少したが、そのうち鉄鋼はユーザーおよび問屋筋の買控えにより、2月以降増勢を続けている。

3月のメーカー原材料在庫は、前月に引き続き減少した。国産製品原材料在庫は横ばいに推移したが、輸入素原材料在庫は、減少している。

最近の設備投資動向を機械受注統計(海運を除く民需)についてみると、昨年末以降漸減傾向をたどっているが、業界では4~6月の実勢を強含み横ばいと予想している。39年度設備計画の大きさと合わせても、企業の投資意欲には依然根強さがうかがわれる。

3月から4月前半にかけていくぶん伸び悩みのみえた百貨店売上げ(東京)は、4月後半から5月にかけて顕著な立ち直りを示した。これには例年より早目の暑気到来も影響しているにせよ、消費の基調にはやはり底堅さがうかがわれる。年度初めの給与引上げがほとんど昨年実績を上回る大幅のものとなっているところからみても、今後の消費動向は堅調を続けることが予想される。

商品市況は、弱含みのなかにも一部では下げ一服

4月から5月にかけての商品市況は、大勢として軟弱傾向を続けていることには変わらない。しかし商品別にみると、主要な市況軟化商品につい

ては業界の市況対策の進展がみられ、それがあつた程度の効果をもたらしている。

すなわち、従来から商況軟化をリードしてきた商品のうち、鉄鋼、石油では自主的操短や市中安値物買戻しなど、メーカー側の市況対策実施によって、地合い軟弱のうちにも一部には反発がみられた。また繊維でも、信用不安一服、原糸の需要期入り、自主的操短実施などを背景として、市況軟化の度合いはやや弱まり、品目によっては下げ一服の商況を呈している。

もっともその反面、これまで比較的堅調を続けてきた非鉄、化学製品の一部では、海外市況の一服や新規設備の稼働、および需要面での若干の引きゆるみなどによって、上げ歩調にやや着き配が生じている。この意味では、従来から商況面にみられた跛行性はやや弱まった感がある。なお、木材、セメントなどは従来からの軟化傾向を、また紙・パルプなどは上伸傾向を、それぞれ持続している。

4月の本行卸売物価は前月比 -0.1% と、5か月間の続落をみた。石油、石炭、非鉄などが反騰ないし続伸した反面、粗糖、繊維、鉄鋼などが引き続き低落したためである。一方、消費者物価(東京)は、4月中 $+1.6\%$ と続騰した。これは授業料などのサービス関係費用の大幅上昇を主因としている。

貸出抑制で企業金融はやや引き締めぎみ

4月の金融市場は、本行の債券売戻しに伴い月央までは引き締めぎみに推移したが、その後は多額の財政資金散布によってほぼ平静に復帰した。

全国銀行貸出は4月中159億円増加と、比較的落ち着いた足どりを示した。これは、当月が季節的に資金不需用期であることに加え、5～6月の資金需用期に備えて銀行側が貸出圧縮に努めたことによるものとみられる。

大企業の資金繰りには、全体として著しい逼迫はみられないが、最近における預金通貨回転率の上昇や法人税即納率の低下などからみて、企業

金融は、徐々に引き締めりの方向に向かっているものと考えられる。企業の手元流動性も、漸次減少傾向をたどっているようである。中小企業向け貸出は、3月著増のあと4月には一服ぎみとなっているが、優良取引先に対する金融機関の配慮は引き続きかなり手厚い模様である。

国際収支は赤字継続のなかにも、貿易収支の先行指標やや好転

4月の外国為替収支は、貿易、貿易外とも赤字を続け、経常収支が依然大幅の逆調を示したため、長短資本の流入にもかかわらず、総合では21百万ドルの赤字となった。

4月の輸出は、為替ベースで前年同月比 $+19.6\%$ と著しい伸びを示し、先行指標でみても、当面かなりの好調が予想される。とくに、船舶、合繊などの輸出が依然好伸を続けているほか、ひところ内需に押されて不振となっていた鉄鋼の輸出が、引締めに伴う国内市況の不ぞえから再び伸びを示しはじめている。もっとも、こうした輸出の順調な増大が、海外市場の好況によってささえられている面もあることは見のがせないであろう。

4月の輸入は、為替ベースで前年同月比 $+20.1\%$ と、相変わらず堅調を継続しており、季節調整した金額でも、1～3月とさして変わらぬ高水準である。ただ、先行指標は、輸入関連産業の生産態度がこのところかなり慎重さを加えてきたことや、木材、大豆、粗糖などの反動落ちを反映して、ひところに比べれば着きぎみに見受けられる。

なお、先行指標面での輸出入の動向に対しては、海外要因に基づく交易条件の好転がある程度寄与していることは否定できない。すなわち、成約ベースでみた輸物物価は、国内商況不ぞえにもかかわらず海外商況堅調によって、昨年8月以降9か月間続騰($+1.5\%$)している反面、輸入物価は、粗糖その他国際原料品市況の軟化によって、2月以降3か月にわたって続落(-1.6%)している。